

教育と文化

No.137

令和7年3月



平川敏夫画 上段:『萬華松韻』(1977年/豊川市桜ヶ丘ミュージアム所蔵)・下段:『北濤松風』(2002年/豊橋市美術博物館所蔵)

Contents

P2 巻頭言 「子どもありき」の教育～教育の原点に立ち返る～

P4 三河の文化を訪ねて「樹木と向き合った人」
日本画家 平川 敏夫 小坂井東小 (豊川)

P6 教室随想「読書の必要性」
正文館書店代表取締役 春井宏之

P7 教室の窓辺「自分たちで創り上げる喜びを」
愛教大附属岡崎中 (岡崎)

P8 令和6年度 教育図書出版助成・個人研究助成

P10 令和6年度 かきぞめコンクール

P12 令和6年度 みかわ彩発見 絵画コンクール

P14 特色ある教育活動「地域とともに創る学校」
知立南中 (知立)

P15 親子で楽しむネイチャーウォッチング

P16 文振だより



公益財団法人
愛知教育文化振興会 副理事長 柴田 昌一

巻頭言

「子どもありき」の教育 ～教育の原点に立ち返る～



令和6年度葵中生徒会
マスコットキャラクター
「葵勇者」

教職に就いて間もない頃、「教師は授業で勝負する」という言葉を先輩からよく聞きました。わかりやすく伝え、子どもたちに学びを届ける——そのために授業技術を磨くことこそが良い教師の条件だと信じ、全力を尽くしてきました。しかし特別支援教育との出会いが、それだけでは十分ではなかったのだと、私の教育観を大きく変えるきっかけとなりました。

「子どもありき」「子どもから学ぶ」

ある冬の日、私は特別支援学校への異動を告げられました。それまで経験のなかった特別支援教育に不安を抱えつつ、新年度を迎えました。担当するのは小学5・6年の複式学級で、6名の子どもたちです。これまで40人規模のクラスで教えてきた経験から「授業は何とかなるだろう」と考えていましたが、現実には想像以上に厳しいものでした。最初の授業では、手作りのカルタを使って国語の学習を試みました。しかし、授業が始まる時間になっても子どもたちは遊びを続け、指示に従う様子はありません。一人一人を椅子に座らせるのに15分もかかり、やっとの思いで提示した手作りのカルタは、子どもたちが手に取るやいなや破られてしまいました。

ある朝、登校した子どもが傘立てに座り込んで動かない場面に直面した際、先輩教師から「その子の隣に座り、一緒にその子が見ているものを見てごらん」とアドバイスをもらいました。その子が熱心に見ていたのは、空を飛ぶ飛行機でした。試しに次の授業で飛行機を題材にした具体的な教材を用意すると、その子は次第に学習への意欲を示し始めました。同じ実践でも扱う題材でこれほどまでに結果が違うのかと「子どもありき」の教

育の重要性を改めて実感しました。それまでの教員生活で、教えてきた多くの子どもたちが、関心を持ってない授業内容でも我慢して取り組んでくれていたことに気づかされたのです。教育とは、子どもたちが自ら学びたいと思える環境を整えること。教師が一方的に教えるのではなく、子どもの個性や興味に寄り添いながら学びを進めることが重要です。教員の専門性は「子どもを見る力」にこそあるのだと思います。本校では、教師のこの力を育て「教師主導」から「子どもありき」「子どもから学ぶ」へと視点を変える教育に取り組んで来ました。

「子どもを見る力」を確かにするために 「小学校との連携」

3年前、私は葵中学校に赴任しました。1学期の半ば頃になると、学校から足が遠のいたり、教室でも学びに集中できなかつたりする1年生が目につくようになってきました。その原因を職員と一緒に考えましたがよくわかりませんでした。そこで、「子どもを見るところから始めませんか」と職員に声をかけました。1年生を担当する職員を中心に子どもの声を聞き、授業や休み時間の子ども様子を観察することから始めました。すると次第に、小学校と中学校との違い（ギャップ）になじめず、苦しんでいる子どもたちがいることがわかりました。しかも「小学校」とひとくくりにできず、出身校により感じている悩みが違うことも分かってきたのです。

私が勤務する葵中学校は、井田、愛宕、広幡の三つの小学校区から構成されています。当然それぞれの小学校には独自のルールや特色があるため、その点を配慮する必要があります。また、保護

者も中学校への進学に際して不安を感じていた方が少なくないことがわかりました。

そこで、これらの問題を解消するため、本校では小学校の先生方と連携し、小中学校間での情報共有を進めました。例えば、中学校の職員が小学校を訪問し、授業を見学することで、小学校側の視点を取り入れて中学校教育を見直す機会を設けました。また、小学校の先生方にも中学校を訪問してもらい、実際の授業の様子や校内フリースクール（F組）を見学する機会を用意しました。こうした取り組みにより、小中間のギャップを埋め、子どもたちが安心して中学校で学校生活を送ることができるよう環境を整えることを目指しました。

授業に生かす

中学校では学習内容が多く、特に、定期テストもあるため、限られた時間内に計画的に学習を進める必要があります。そのため、教科担任が一方的に教えるスタイルになりがちです。しかし、小学校では、学校ごとに多少の違いはあるものの、少人数のグループで学習課題について話し合いながら授業を進めるチームでの学習スタイルが取り入れられていました。

そこで、中学校でも子どもたちの交友関係や心理的な関係、発達段階も考えて作成された4人グループで学習課題を見つけ、解決方法を考えるチームでの活動を取り入れるようにしました。時間はかかりますが、子どもたちは脳をフル回転させながら考え、安心して意見を出しています。また、わからないことをチームの仲間に気軽に質問しながら学習を進める様子も見られるようになりました。

例えば理科の授業では、子どもたちの興味や疑問

問を引き出す教材を準備し、できるだけ子どもたちが自ら学習課題を生み出せる導入を工夫しました。実験はチーム別に行い、結果について意見を出し合い考察することを重視しました。これまでの理科の授業では、子どもたちは実験や観察の「結果を得ること」だけが目的になりがちでした。しかし、子どもたち自身が解決したい問題を見いだすことができれば、目的意識をもって実験・観察に取り組む、得られた結果を自然の事象・現象と関連付けて考えることができるだろうと考えたのです。

授業実践例

1年生の理科の授業では、教師が用意した6枚の火山の写真を見て、「火山が平べったい形、富士山のような円すい形、お椀を伏せたような形になるのはなぜだろう」と子どもたちは疑問を持ち、その原因を考え始めました。「マグマの違いだろうか」「温度かな」「噴火の回数かもしれない」子どもたちは様々な仮説を立てます。そこで、教師はマグマに見立てた歯科用印象材を紙皿の下から押し出し、積み重なって火山ができる様子を再現しました。その後、子どもたちは印象材に加える水の量を変えて粘度を調整し、実験を行いました。



理科授業
チームで結果の考察

その結果「粘度が高いと、お椀を伏せたような形になる」「粘度が低いと、平べったい形になる」ということを導き出したのです。しかし、授業の終盤、教師が「平べったい形のキラウエア火山と富士山のマグマの粘度には大きな差がない」というデータを提示しました。子どもたちは「粘度だけでは火山の形の違いを説明できない」と気付きます。すると、次の授業では、「富士山の形がきれいな円すい形になる理由を調べたい」という声が上がりました。こうした授業を通じて、子どもたちが自ら疑問を持ち、考え、実験を通して答えを探す学びの姿勢を育んでいきたいと考えています。

教育の原点を忘れずに

「子どもありき」という言葉が示す通り、私たち教員が立ち返るべき原点は「子どもから学ぶ姿勢」にあります。そして、今の子どもをよよく観察して、保護者との連絡を密にし、小学校との連携を深めて情報を得ることで、子どもたち一人一人の現状を知り、子どもたちに寄り添い関心をひきつける授業が可能となります。これは、三河教育がこれまで大切にしてきたこと、そしてこれから大切にしていかなければならないことです。今後も、子どもから学び、子どもたちに寄り添いながら教育の原点を忘れずに教育を実践していきたいと強く思います。

翻って、「子どもありき」「子どもから学ぶ」を、愛知教育文化振興会で考えると、「現場ありき」「現場から学ぶ」と言えるでしょう。今後更に三河教育研究会の先生方の意見を取り入れ、学校現場と本法人が一体となり、先生方が必要とする刊行物づくりを推進してまいります。

樹木と向き合った人

日本画家 平川敏夫

豊川市立小坂井東小学校長 中嶋 桂

故郷に残した足跡



豊川市文化会館大ホール緞帳(原画は表紙の『萬華松韻』)

小坂井東小学校の校長室には、横幅約1・5メートルの絵画『水草と家』が飾られています。校区出身の日本画家、平川敏夫(1924〜2006)の初期の作品です。

同じく、母校にあたる小坂井中学校では、平成の前半に「渥美半島40キロ歩行」が毎年行われていました。2年生全員が半島先端の日出の石門を夜明け前に出発して、雄大な日の出の感動を胸に表浜を歩き通す立志行事です。この行事は、時の多田祐一郎校長が、渥美浜を描いた平川敏夫の墨画から着想を得て立ち上げたものです。また、旧宝飯郡小坂井町では、昭和



『水草と家』(1955年/小坂井東小学校所蔵)

40年から昭和末まで、新成人一人一人に記念品として平川敏夫の『岩割の松』の絵皿が贈られていました。

平川敏夫が残した数多くの絵画は、東三河を中心に全国各地で所蔵されています。美術館はもとより市役所や病院など、様々な施設で目にする事ができます。豊川市文化会館大ホールの緞帳や豊川市小坂井文化会館(フロイデンホール)の緞帳も、平川敏夫の原画によるものです。

作品展も国内外の各地で催されてきました。近年の大きな作品展としては、2004年の秋に浜松市秋野不矩美術館で開催された「浜名湖花博開催記念 平川敏夫が描く自然の美展」が記憶に新しいところです。

この頃から見られる独自の墨画は、平川敏夫の代名詞ともいえる白抜きの技法によるものであり、その作風は清閑かつ幽玄な境地に至りました。

平川敏夫の言葉

60代の円熟期を迎えた平川画伯は、小坂井中学校の研修会に招かれたことがあります。作務衣姿で職員の前立った画伯は、穏やかな語り口で半生を振り返りました。

少年期に厳しい徒弟生活を経験したこと、修業時代にはひたすら先人の絵を模写して画家としての基礎ができたことなど、昔はそれらが当たり前だったという話がありました。肝心の白抜き技法については、「これは企業秘密ですが」と微笑みながら、アラビアゴムを使って染め抜きを施し、さらに薄墨を重ねていくという手順を説明してくださいました。

平川画伯が終生めざしたことは、「無色になるまで描きたい」という言葉に凝縮されています。時代順に作品を眺めていくと、不要な色と形を排して、本当に描きたいものをひたむきに追い求めた業から、一歩一歩目標に近づいていったことが分かります。

画家になるまでの歩み

大正13年に生まれた平川敏夫は、小坂井尋常高等小学校を卒業後、16歳のときに故郷を離れ、京都の着尺図案塾に住み込みで入門をしました。活発だった幼少期に足を傷めていたことから進学を断念し、「しよがな。俺一人で作るぞ」と奮起して選んだ道です。徒弟生活を通して、日本画の基礎と忍耐強さを身に付けました。

昭和16年、太平洋戦争が始まったため帰郷しましたが、戦争が起きずに京都にとどまっていたら、あるいは違った人生を歩んだのかもしれない。戦時中に県の農林技手になり、終戦後23歳で退職、結婚を機に、いよいよ画業に打ち込むようになります。

以前から中村正義、星野眞吾と交流があり、ほどなく中村の勧めで出品した第3回創造美術展で初入選を果たすと、その後も、新しい日本画をめざす美術展で入選を重ねていきました。途中25歳のときには、中村と星野が豊橋で開いた「中日美術教室」に大森運夫、高畑郁子とともに加わっています。ご長男に何うと、当時は、自宅で小学生を教えたり、写生会に付き添ったりしたこともあったそうです。

画伯自身による画集のあとがきに、次のような一節がありました。

「老樹は、先人達との語らいを秘め、過ぎし歴史の物語を思いおこし、人間社会の平和を願う。混濁と不調和の世の流れを憂う」

長年にわたり樹木と向き合った平川敏夫は、私たちが生きていく今の世の中をどう見つめているのでしょうか。



『池畔』(1975年/豊川市桜ヶ丘ミュージアム所蔵)

独力で切り拓いた道

平川敏夫は、多くの友人と関わる一方、師弟関係をもたない独学の道を行んでいきました。初期には風景を多く描き、素朴な幻想をたたえた作風に特徴が見られます。

その後、34歳のときに伊勢湾台風の被害を目の当たりにした経験がひとつの転機になりました。海に迫った断崖が無残にえぐられ、海水をかぶって白骨のように見えた防砂林が、それでも力強く生命を保っている有様に感銘を受けたからです。それからは、様々な樹木の姿に、自然がもつ計り知れない生命の力を見出し、いきました。

加えて、36歳のときに画家たちと出かけたヨーロッパ旅行が墨画を追究するきっかけになりました。日本画ならではの素材を生かし切った仕事こそ世界に通用するのではないかと、できるだけ色を取り去ってやれないものかと考えるようになったのです。

このような契機を経て、作品の色調は次第に絞られていきました。北海道で取材をして描いた『樹淵』は「静まりかえった黒い淵の中から、生きていくものへの話し声が聞こえる」と感じた心を表現しています。



『樹淵』(1963年/豊橋市美術博物館所蔵)

【写真提供】豊川市桜ヶ丘ミュージアム

豊橋市美術博物館、豊川市文化会館

【参考文献】「小坂井町誌 通史編」

「画集 平川敏夫」(京都書院)

「平川敏夫展」(中日新聞社・東海テレビ放送)

「読書の必要性」

正文館書店代表取締役 春井 宏之



Profile はるい ひろゆき

昭和36年生
 昭和62年 大日本図書入社
 平成9年 正文館書店入社
 平成23年 正文館書店代表取締役社長
 平成27年 愛知県書店商業組合理事長（現職）
 令和元年 日本書店商業組合連合会副会長（現職）

本の良さって何でしょうか。読書の必要性とは。子どもからの「なんで本を読まなくちゃいけないの」という問いに、説得力のある言葉で答えてあげることができませんか。

昨今、日本人の日本語が酷く壊れてきていると感じています。日頃の会話、ネット上の説明、SNSの発言、さらに言えば全国に放送されているテレビ局のプロのアナウンサーでさえも、おかしな日本語表現をしている場面によく出会います。

そのような中、日本でも遅ればせながら子どもたちにデジタル端末を与えて教育を進めています。ところが、デジタル先進国はすでに端末を学校に持ち込むことを禁止しました。なぜなら、実社会では犯罪として取り締まらなければならないネット上の表現や反社会的な広告、およびSNSでのやりとりが原因で発生する問題や事故に、子どもが一人で簡単にアクセスできてしまいます。ネット上であるという理由で、法律などの対処方法が確立されていないことが多く、大人でも解決できない事件や事故に子どもをさらしているという現状に、学校のような組織が責任を持ってないからです。ここで本とデジタルの相性を考えてみます。実際に、電子書籍で400ページの小説を最後まで

読破するなど、読書を電子書籍で日常化している人がどれくらいいるのでしょうか。400ページと聞いただけで「長い」とか「めんどろ」と、一般的には感じるでしょう。めんどろさいことをしないのが「デジタル化の便利」なので、皮肉にも電子書籍は読書する人を減らすという結果になります。少し前に、便利という理由で読書専用の端末を作り、今の2〜3倍の経済的利益を目論んだ企業がありましたが、逆の結果になってしまい撤退しました。本とデジタルの相性はあまりよくないようです。

もともと、デジタルの良さは、プロセスを飛ばして直接結論に至れることです。反対に、教育現場はプロセスを理解させることを重視しています。子どものうちから便利を享受してプロセスにふれずに育っていくと、大人になってから出会う多くの問題への対応に苦慮することになるでしょう。そこで本による読書の必要性を再考します。日本人の知力や民度の源は日本語です。日本語を駆使できる人間を育てなければなりません。読書することではか得られない、生きていくための力とはなんでしょう。第一に表現力。端的で明快な表

現をする力は、様々な場面での多様な語彙や表現にふれることで得られます。第二に読解力。相手の表現に対して、何を伝えようとしているのかを場面や言葉、さらには行間にある思いも含めて心まで想像することで得られます。第三に俯瞰力。発生している複数の事象や心情を俯瞰し、何かに偏らないバランスの取れた対応を考えることで得られます。

本の良さとして、もう一つ取り上げます。本の記事は、情報がシリアル（直列）で、一つ一つのパラメーターを自分に合ったスピードで、順番に頭に入れていくことができます。それに対して、ネットやビデオは、情報がパラレル（並列）で、音声や画面上のあらゆる事物が、同時に発信され、どんどん流れています。本場に必要で重要な情報にすべての視聴者が正しくふれられたかどうかは定かではないと思われれます。



教室の窓辺

自分たちで創り上げる喜びを

愛知教育大学附属岡崎中学校

教諭 川村 大樹

本校は開校以来、子どもを真ん中においた「はじめに子どもありき」の教育を実践し続けています。各教科の授業では、身の回りの事象から抱いた興味や関心をもとに学びを進め、自分で調べたり、取材したりしてまとめた考えを積極的に伝え合う姿が多く見られます。そうした日常的な取り組みの延長にある宿泊行事においても子どもの思いを大切にし、未知の問題に対して果敢に挑戦する姿を目指して実践に取り組んでいます。その中で、私が3年間持ち上がりで担当している現3年生が2年生の時に実施した自然体験活動について紹介させていただきます。

自然体験活動に向けた学年集会で「行き先、活動はあなたたちで決めてください」と伝えました。子どもは、想定を超えた教師の言葉に「自由すぎるでしょ」と叫んでいましたが、その発言とは裏腹にうれしそうな表情を浮かべていました。最初に行ったのは、1年時でのオリエンテーション合宿で得た課題の整理でした。「仲間と協力して楽しめたが、まだ足りない」という意見に全員が共感し、自然体験活動で「真の楽しさを味わいたい」という思いを共有しました。その後、実行委員を中心にねらいに沿った活動や、活動に適した

場所を考え、学年集会で提案しました。議論を重ねた結果、行き先は海と山に囲まれた福井県のブルーパーク阿納に決定しました。

メイン活動は、自分たちで製作したいかだに乗って海に漕ぎ出す「いかだフェスティバル」に決まりました。子どもは「どうすれば丈夫で、安定したいかだを製作できるか」という問題を追究し始めました。「材料は竹がいいよね」「どうやって固定しようか」など、設計図を考え、試作品を製作したり、何度もブルーパークの方と連絡を取って海の状態を確認したりしました。3月には、学校のプールに製作したいかだを浮かべるプレ活動を実施するなど、試行錯誤を重ねて、各クラスの個性が光るいかだを完成させました。

自然体験活動当日は天候にも恵まれ、無事に活動を終えることができました。振り返りの際には、「一から準備をするのは大変だったが、自分たちで創り上げる喜びを感じた」「仲間と協力してやりきった達成感は何にも変えられない。本当の楽しさを味わうことができた」などと書かれており、子どもが自分で設定した目標を達成できたことへの満足感を見取ることができました。

子どもの主体的な学びを支えるために、教師は何かができるのでしょうか。大切なことは、教師が見通しをもち、子どもに願いをかけることだと考えます。授業や行事を経た先、どんな子どもになっほしいのか、その姿を実現するためにどうすればよいかを教師が具体的にイメージし、準備をしておくことが必要だと思っています。これからも子どもが本気になって取り組み、達成感を得られるような授業実践、学年行事を考えていきたいです。



製作したいかだで海に漕ぎ出す

川村大樹教諭は、本校に赴任して4年目、今年度は3年の学年主任として活躍中です。

本校では授業や行事などの教育活動を子どもの主体性を活かして展開していますが、それは、子どもと教師、また子ども同士の抜群の信頼関係があつてこそ成り立ちます。川村教諭は、日々の授業を大切に、子どもたちとの信頼関係を作っています。

子どもたちの思いをとらえて教材を選び単元を組む。授業での反応、振り返りで子どもの意識の流れを丹念に追う。朱書きや問い返しで思考を深める。次の化学変化を期待して授業をコーディネートする。こうした教師としてごく当たり前の取り組みを、日々丁寧に積み重ねることで子どもたちとの信頼、クラスや学年の絆を強固なものにするのです。

授業でつながる、授業でよりそう。三河の教師が大切にしてきた姿勢をもつ川村教諭のこれからに期待しています。

（副校長 手島 英樹）

令和6年度 教育図書出版助成

本法人では、教育文化の振興と子どもたちの健やかな成長を願い、教育図書の出版に対して助成するとともに、その内容を広報しています。

この助成は、三河の小中学校教員及び、教員であった個人、これらの方々を代表とするグループが、学校・家庭・地域に関わる教育活動や研究をまとめた図書で、経費の多くを公費等の援助を受けずに出版したものを対象としています。

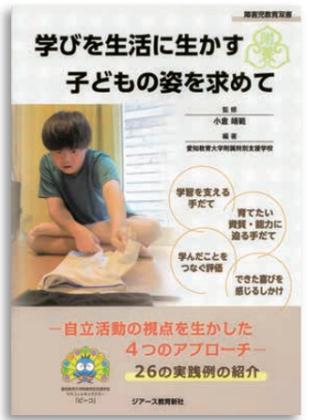
本年度は、審査会において3点の助成が決定されました。なお、令和7年度の応募要項は、4月中旬から本法人のホームページに掲載されます。

学びを生活に生かす 子どもの姿を求めて

著者 愛知教育大学附属特別支援学校
B5判 92頁 2200円

愛知教育大学の小倉靖範先生監修のもと、令和2年度から令和6年度までの研究をまとめ、『学びを生活に生かす子どもの姿を求めて』を発刊しました。

5年間の研究では、「学習を支える手だて」、「育てたい資質・能力に迫る手だて」、「学んだことをつなぐ評価」、「できた喜びを感じるしかけ」という四つの



アプローチによって成功経験を積み重ねた子どもが、学びを生かそうと自ら動き出すことを願って実践を進めてきました。本書は、その研究成果を26の実践例をもとに紹介する内容となっています。

第一章では、自立活動の視点や発達検査の結果を生かした「その子らしさ」のとらえ方や、「その子らしさ」を生かした四つのアプローチを取り入れた授業のつくり方について紹介しています。

第二章では、中学部職業・家庭科の実践をもとに、四つのアプローチについて具体的に説明しています。授業者が「その子らしさ」をどのように生かして四つのアプローチを考え、講じたのか、それぞれのアプローチによって子どもがどのように変容したのかなど、子どもたちの姿をもとにしたわかりやすい内容となっています。

第三章では、四つのアプローチについて、小学部、中学部、高等部における各教科等の26の実践例を載せています。

第四章では、様々な教科等において四つのアプローチによって成功経験を積み重ねた子どもたちが、実際に学びを生活

学的な見方・考え方を働かせることで、筋道を立てて考えたり、統合的・発展的に考えたりするなどの学びへと洗練させる様子が示してあります。

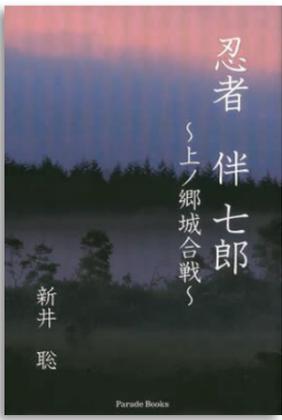
忍者伴七郎 く上之郷城合戦

著者 新井 聡(蒲郡市立大塚中学校)
B6判 54頁 1100円

本書は、戦国時代に活躍した甲賀忍者が上ノ郷城(蒲郡市)を舞台に鶴殿長照と争った歴史小説です。

郷土蒲郡が歴史の表舞台に出ることはほとんどありませんでしたが、この上ノ郷城合戦は、通史全体に影響を及ぼした合戦なのです。また、初めて忍者の存在が文献に出てくる戦いとしても有名で、この合戦を多くの人に知ってもらいたい、そして甲賀忍者や郷土の鶴殿長照のことを知ってもらいたいと思い、筆を執りました。

桶狭間の戦いの後、今川氏の人質だった松平元康は、三河国平定を目論みます。しかし、今川方の武将である鶴殿長照は、義元亡き後も今川方につき、元康と敵対します。長照の上ノ郷城を攻めあぐんだ元康は、忍者を使って、城を攻めることにします。この忍者が、甲賀忍者伴与七郎なのです。彼は、城に火を放ち、長照の子らを連れ出し、長照を討ちます。



に生かしている姿を紹介しています。本書が、特別支援教育に携わる方々だけでなく、子どもたちの豊かな生活を願って教育活動に取り組みられている多くの皆様のお役に立てればと願っています。

算数科の深い学びを实践する

著者 岡崎市算数・数学教育研究部
B5判 292頁 2500円

私たち岡崎市算数・数学教育研究部は、現行の学習指導要領(平成29年告示)の完全実施前の令和元年に『算数科の深い学びを实践する(黎明書房)』を出版し、「深い学び」に迫る授業の可能性を提案しました。

その中では、「深い学び」の趣旨を捉えながら、これまでの授業実践から見えてきたものを頼りに、算数科の内容とそつながり等を明らかにしました。それは、学習内容を指導する上で「深い学び」につながる数学的な見方・考え方が具体的にはどのようなものであり、それがどのように働き、系統的にどのようなつながりや発展を見せるかを探る営みでした。その結果、そのことを追究する授業実践こそが、実質的な「深い学び」の真意であり、算数科の本質に迫るものであることを確かにしました。

学習指導要領が、令和2年度より小学校で完全実施されたのを機に、私たちはそれまで構想し続けてきた算数科における「深い学び」の検証に着手しました。

令和6年度 「個人研究助成」 審査を終えて

令和3年度から3年間、研究を推進された10名の先生方の論文審査が行われました。

昨今の厳しい教育環境下においても、三河教育の本質をつらぬく力作ばかりでした。ここでは、柴田昌一審査委員長の講評の概要とともに、優秀と選出された3名の先生方を紹介します。

講評

いずれの論文も三河教育の伝統である「子どもありき」の理念を核に据え、子ども一人一人の姿を的確に捉えながら、教育の新たな可能性を探求する意欲的な取り組みが顕著でした。また、子どもへの深い愛情と成長を支えようとする真摯な姿勢が伝わり、地域に根ざした教育の重要性を改めて認識する機会となりました。

特に、中学校では、教科を横断した単元の構想や、ICTを効果的に活用した取り組みも見られ、主体的で深い学びの実現に寄与していました。これらは、時代の変化に対応した先進的な研究として高く評価できます。また、異動による校種の変更にもかかわらず、研究を発展させた事例もあり、その熱意と努力には深く敬意を表します。

執筆された10名の先生方の研究成果が、三河教育の更なる発展に寄与することを確信しております。



その中で見えてきた子どもたちの姿こそが「深い学び」の授業の実像であり、私たちの考えをより鮮明にさせるものでした。実践を通して見えてきたことは、子どもが数学的な見方・考え方を働かせる活動は、算数科の学習をより創造的・発展的にし、目的意識をもって問題を解決する姿となって私たちの前に現れるということです。

本書は、その子どもたちの姿を1年から6年までの21の授業実践を通して、具体的に現したものです。子どもが授業中に発言したそれぞれの言葉に対して、どのような「見方・考え方」が現れたのか、また、そうした子どもたちの発言を促す教師の意図的・計画的な支援はどのようなものであったかを記述しました。さらに、数

研究成果論文審査結果

最優秀賞(1名)

田原市立田原中部小学校 津田 将吾



地域の人、もの、ことと関わることで、主体的・対話的で深い学びを引き出す社会科学習 (社会)

優秀賞(2名)

豊田市立朝日丘中学校 福田 真美



地域と連携した郷土芸能の体験活動を通して、地元の伝統芸能に愛着をもつことのできる生徒の育成 (音楽)

職場の先生方や地域の方、学区の小中学校など、多くのご協力のおかげで研究実践ができました。ありがとうございました。



豊橋市立東部中学校 安田 晃治

自ら幸せな生き方の視野を広げる子を育てる総合的な学習の時間(総合的な学習)

子どもたちや先生方のおかげで、多くのことを学ぶことができた3年間でした。多くの人の支えに、感謝しています。

令和6年度

かきぞめコンクール



「かきぞめ手本」を題材にした第14回かきぞめコンクールを実施したところ、三河地区から小学生の部2128点、中学生の部447点、計2575点の応募がありました。

書家・「かきぞめ手本」編集委員の先生方が厳正に審査し、各学年最優秀賞1点、優秀賞2点、佳作7点、奨励賞20点選ばれました。入賞者一覧をHPに掲載していますので、ぜひご覧ください。



入賞者一覧へ



審査の様子

講評

「かきぞめ手本」編集委員長

豊田市立大沼小学校長 河原 佳代子

今年も多くの素晴らしい作品に出会うことができました。小学校一・二年生の硬筆作品では、一文字を丁寧に書きつづも全体にひとつの流れが感じられ、真剣味が伝わります。三年生以上の毛筆作品では、基本点画の正しさや確かさ、また美しくまとめた字形から、高い集中力を感じます。中学生は力強さの中にも行書の柔らかさがよく表現され、「書」に対する書き手の真摯な思いがうかがわれます。一心に文字に向き合い、文字を通して自己と対話する時間が、確かな心の成長を育んでいることを実感しました。

いつの時代にあっても、人の手から生み出される文字は、雄弁に書き手の思いを語ります。心と心を結ぶ書字文化が、三河の子どもたちに深く根付き、脈々と引き継がれていることに感謝します。



表彰式の様子

最優秀作品の紹介

本年度のかきぞめコンクールで、最優秀賞を受賞された9名のみなさんの作品を紹介します。

〔小学生の部〕

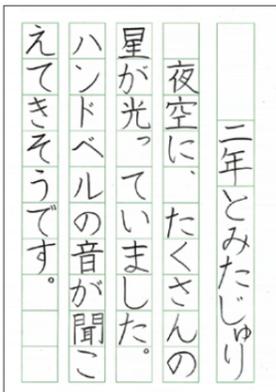
豊田・四郷小学校

一年 伊藤 優里



刈谷・衣浦小学校

二年 富田 樹里



令和6年度かきぞめコンクール入賞者（最優秀賞・優秀賞・佳作）一覧

	小1年	小2年	小3年	小4年	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
最優秀賞	豊田・四郷小 伊藤 優里	刈谷・衣浦小 富田 樹里	西尾・中畑小 中村 日咲	豊田・若園小 堀端 遼人	西尾・平坂小 鳥居 咲良	豊田・野見小 村瀬 結香	幸田・幸田中 鳥居 和華	みよし・三好丘中 薬師寺咲来	豊田・井郷中 杉淵 柊二
優秀賞	豊田・寺部小 上田 奏帆	豊田・加納小 関 傑	刈谷・日高小 飯海 陽菜	知立・来迎寺小 遠藤 優杏	豊田・中山小 伊藤 里紗	豊田・大林小 渡辺 由真	豊田・若園中 堀端 慶人	豊田・美里中 村瀬 朱音	豊田・高橋中 篠田 綾香
	豊田・寺部小 木下 京子	豊田・寺部小 八木 花奈	西尾・花ノ木小 本多 綾乃	蒲郡・竹島小 白井 里依	豊田・浄水小 野田 芽生	西尾・平坂小 花岡姫菜子	安城・安城西中 尾関 小夏	豊田・前林中 山田 晴	豊田・猿投台中 戸松 もか
佳作	岡崎・城南小 稲垣 杏花	豊田・寺部小 関 菜乃遥	岡崎・竜谷小 林 千歳	豊田・朝日小 堀 唯花	刈谷・亀城小 豊野 莉唯	刈谷・小垣江小 加藤 亜子	豊田・崇化館中 山本 悠加	豊田・崇化館中 勝本 真帆	豊田・高橋中 村瀬 敦哉
	碧南・棚尾小 尾方 千花	豊田・寺部小 八木 千嘉	豊田・拳母小 久保田莉永	豊田・寺部小 都築優依華	刈谷・衣浦小 菊地 結太	豊田・伊保小 橋本 和奏	豊田・猿投台中 寺地優里杏	豊田・高橋中 加藤 彩羽	豊田・猿投台中 加藤 琴葉
	刈谷・衣浦小 服部 惟	豊田・市木小 安藤 光佑	豊田・山之手小 長谷 帆菜	豊田・大林小 榊原 彩子	豊田・中山小 檀浦 由芽	豊田・朝日小 吉藤 花	豊田・藤岡南中 伊藤 颯汰	豊田・若園中 佐々木逢花	豊田・若園中 山崎 妃葵
	豊田・寺部小 山田 詩遥	豊田・大林小 高橋 孔明	西尾・平坂小 角 香澄	豊田・大林小 山内 麗愛	豊田・若林東小 小林 一路	豊田・前山小 水口優莉子	安城・桜井中 磯谷 海瑠	豊田・若園中 佐々木梨花	豊田・梅坪台中 中島 阿子
	豊田・美山小 橋屋 咲希	西尾・平坂小 岩田 七奈	西尾・平坂小 花岡 想太	西尾・平坂小 榊原 英悟	みよし・中部小 鈴木芽依奈	豊田・大林小 榊原 桃子	安城・桜井中 伊藤 絵天	安城・桜井中 高松 ゆり	豊田・井郷中 赤澤 芭菜
豊田・若林東小 小阪 心桜	西尾・矢田小 長谷 奏澄	西尾・矢田小 松野 璃子	西尾・一色西部小 杉江 滯	みよし・中部小 尾藤 道彦	豊田・若林西小 山口 純佳	みよし・三好中 尾藤 朝飛	安城・東山中 今井 花音	西尾・一色中 浅井 咲季	
西尾・中畑小 石原 菜奈	西尾・寺津小 加藤 慧	西尾・吉田小 河野琥太郎	知立・来迎寺小 平澤 桃花	蒲郡・蒲郡南部小 篠原 耕壽	西尾・平坂小 岩田 望央	みよし・南中 坂井 祐月	愛教大・附属名古屋中 青山 奈央	幸田・幸田中 青木 陽和	

〔中学生の部〕



西尾・中畑小学校
三年 中村 日咲



豊田・若園小学校
四年 堀端 遼人



西尾・平坂小学校
五年 鳥居 咲良



豊田・野見小学校
六年 村瀬 結香



幸田・幸田中学校
一年 鳥居 和華



みよし・三好丘中学校
二年 薬師寺 咲来



豊田・井郷中学校
三年 杉淵 柊二



表彰式（上段：春夏の部 下段：秋冬の部）

「みかわ彩発見絵画コンクール」への取り組みが顕著な学校に対して、本法人から「学校賞」を贈呈しています。児童数500名以上の大規模校、児童数150名以下の小規模校、その中間の中規模校に分け、それぞれの中から一校を決定します。本年度は次の3校です。

《大規模校》西尾市立西尾小学校
豊川市立中部小学校

《中規模校》該当なし

《小規模校》豊田市立追分小学校

右の学校には本法人から学校賞のクリスタル賞状盾と、応募児童全員に参加賞として鉛筆を贈りました。

最優秀賞入賞者及び作品（秋・冬の部）



家族みんなでクリスマス
豊橋・鷹丘小学校
1年 桃野 栞奈



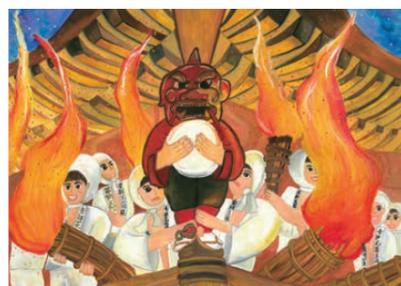
年こしおもちつき
岡崎・豊富小学校
2年 大海 慎太郎



家族みんなでかたたり
豊橋・鷹丘小学校
3年 桃野 杏理



今年も楽しいクリスマス！
愛教大附属岡崎小学校
4年 平田 和楓



滝山寺鬼祭り
岡崎・小豆坂小学校
5年 増永 奨



秋空に舞う扇
刈谷・双葉小学校
6年 近藤 佳歩

優秀賞入賞者（秋・冬の部）

1年	2年	3年	4年	5年	6年
豊田・寺部小 松枝 拓海	愛教大附属岡崎小 内山 綾	愛教大附属岡崎小 中井 春輔	岡崎・井田小 眞壁 明志	愛教大附属岡崎小 岩井 紘太郎	愛教大附属岡崎小 石垣 瑠菜
豊田・畝部小 松山 凜香	幸田・深溝小 原田 朝陽	安城・丈山小 米川 知沙	高浜・吉浜小 中川 知咲	安城・安城中部小 峰田 椋平	蒲郡市・塩津小 牧原 佐奈



今年で7年目を迎えた「みかわ彩発見絵画コンクール」に、春・夏の部2137点、秋・冬の部697点の応募がありました。応募にご協力いただきました皆さんにお礼を申し上げます。

本年度の最優秀賞入賞者とその作品、優秀賞入賞者を紹介します。

佳作・奨励賞を含めた入賞者一覧は、本法人HPに掲載しています。



入賞者一覧へ

今年度も、春・夏の部、秋・冬の部にも多くの作品の応募がありました。

今年度の作品の特徴は、にぎやかな人の集まりや人との関わりの中で子どもたちの心が動いた場面をモチーフにした作品が多くあったことです。

中でも、春・夏の部では、迫力のあるお祭りを多くの人たちが楽しんでいる場面、秋・冬の部では、餅つきを楽しんでいる場面が多くありました。どの作品も表情が豊かに表現され、楽しさが伝わってきました。コロナ禍を経て、子どもにとって表現したくなる体験の機会が戻ってきていること

講評

三河教育研究会造形部会長
岡崎市立美川中学校長 安藤 眞樹

最優秀賞入賞者及び作品（春・夏の部）



探検隊
幸田・坂崎小学校
1年 鈴木 湊人



キラキラカゲみーけ!!
岡崎・井田小学校
2年 天野 禾梨



だれが速いかスライダー
愛教大附属岡崎小学校
3年 杉田 あおい



七夕まつりで金魚すくい
安城・新田小学校
4年 峯村 花乃子



「みなぎる力！」知立まつり
知立・知立西小学校
5年 大和 千燈乃



夏祭りのかき氷は最高！
岡崎・羽根小学校
6年 森本 千咲

優秀賞入賞者（春・夏の部）

1年	2年	3年	4年	5年	6年
豊田・平井小 古井 希実	豊橋・栄小 園田 莉央	岡崎・井田小 則俊 杏寿	岡崎・根石小 出口 羽良々	岡崎・小豆坂小 増永 奨	刈谷・双葉小 近藤 佳歩
豊橋・福岡小 小田原まひろ	蒲郡・形原北小 倉下 鈴加	豊川・豊小 大藪 璃座	岡崎・井田小 眞壁 明志	豊田・前山小 鈴木 惺也	安城・丈山小 杉浦 こうめ

特色ある教育活動

「地域との連携」を生かした取組紹介

地域とともに創る学校

知立市立知立南中学校長 福井 信也

知立市の猿渡川以南、東西に延びる学区をもつ本校は、知立南小、知立東小、八ツ田小を卒業した580名ほどの生徒が通っています。中でも知立東小学区は大規模集合団地があり、外国籍の住民が多く、本校生徒の20%以上が、外国にルーツをもつ生徒です。

多文化共生社会を生き抜く生徒の育成

令和4、5年度、市教委から研究委嘱を受け、コミュニケーション能力を高め、多様な考えや価値観を理解し認め合える生徒の育成に取り組んできました。一定の成果を得る中、真に多文化が共生する社会に対応するためには、学習面だけでなく、地域をも含めた生活全般で、生徒たちが自分で考え、主体的に行動できる支援や場の在り方課題が残りました。

そのような中、令和6年度からは、さらに市教委から中学校区でのコミュニティ・スクールを推進する指定を受け、学校運営協議会を設置しました。

コミュニティ・スクール「南風会」の取組

立ち上げに際して生徒会の役員に直接、「地域とともに学校を楽しみたいものにしていくためには」と投げかけてみました。すると、文化祭や体育大会を工夫するなどの意見が続き、「花火大会」をもう一度やりたいという思いが出てきました。役員は、1年時に開催された40周年記念行事で運動場から打ち上げた花火が、強く印象に残っていたようです。しかし、開催に必要な50万円の確保については、資源回収の他、具体的な取り組みは出てきませんでした。

そこでこの話を学校運営協議会に持ち掛けると、資源回収に加えて、かつて行っていたバザーが提案されました。ただし、PTA主体のバザーでは保護者に負担がかかるので、教育効果も考慮し、生徒が物品に値札をつけたり店を準備し売ったりと、生徒主体で開催するバザーにすることが確認されました。PTAは、生徒の活動をできるだけ支援するという初めての試みに挑戦することになったのです。

さらに資源回収やバザー（SDGsマーケットフェスティバル）だけでなく、知立市が毎年8月に開催している「よいとこ祭り」にも生徒が出店しました。このようにして目標金額が集まり、無事「知南中SDGs花火大会」を、PTAだけでなく、地域ボランティアに支えられながら生徒主体で開催することができたのです。

今後の取組

今年度はさらに、生徒議会も復活させました。生徒会が提案した新たな委員会を立ち上げ、体育大会や文化祭も委員会を核に生徒主体で取り組んでいます。さらに、団地の独居老人への声かけボランティアチームが結成されるなど、主体性の芽は大きく育ってきました。

来年度は、週3日の6限後に、生徒自身で考えて活動する時間（25分）を新設します。自分に必要な学習や研究、体験、委員会の活動など、主体的に生徒が取り組む場です。

コミュニティ・スクールを核に、地域と学校が互いに化学反応を起こすか楽しみます。



知南中SDGs花火大会の様子

親子で楽しむ ネイチャーウォッチング



平成28年度から始まった「ネイチャーウォッチング」は、令和7年度で10年目を迎えます。年々参加希望（申し込み家族数）が増え、令和6年度は、1,333組もの応募がありました。

A日程、B日程それぞれ30組ずつ計60組の抽選で選ばれた家族は、三河の自然を親子で満喫するとともに、自然に対する学びを深めることができました。寄せられた参加者の感想の一部を紹介します。

参加者の声

- 虫の種類に合わせた網の使い方を教えていただき、これからの昆虫採集が楽しみになりました。
- ふだん野鳥を観察することはないので、親子ともども新鮮な体験ができました。干潟の生き物探しは時間が足りないと思うほど、夢中になりました。
- 息子はネコギギやカワニナを捕まえるという目標をもって挑みました。残念ながら捕まえることはできませんでしたが、工夫しながら捕まえようとしている様子が楽しそうでした。
- 植物についていろいろ知ることができて、おもしろかったです。ヒガンバナの謎が解けて、個人的にはスッキリしています。
- 講師の先生のお話が興味深く、写真も盛りだくさんで楽しめました。天体観測にまつわる数々の挑戦や諦めない姿勢も心に残り、元気をいただきました。
- 化石発掘を数か所で体験しているが、他と比べるとたくさんの貝の化石を見つけられたのが、最大の楽しさでした。



まさに、「体験に勝る学びなし」という感想ばかりで、主催者としてもうれしい限りです。令和7年度も、本法人のメイン事業の一つとして実施します。

令和7年度ネイチャーウォッチングの日程が決まりました。

より多くの家族が参加できるよう、A・B・Cの3つの日程とし、**合計90組に拡大して開催**します。

A日程	B日程	C日程
A1 「めざせ 虫博士」 日時：7月12日(土) 場所：岡崎市少年自然の家	B1 「川の生き物調べ」 日時：8月23日(土) 場所：岡崎市ホテル学校	C1 「里山の生き物ウォッチング」 日時：10月19日(日) 場所：東三河ふるさと公園
A2 「干潟の鳥ウォッチング」 日時：9月21日(日) 場所：田原市・汐川干潟	B2 「化石を発掘しよう」 日時：11月16日(日) 場所：豊橋市・伊古部海岸	C2 「星空ウォッチング」 日時：11月29日(土) 場所：岡崎市少年自然の家

※参加申し込み等詳細については、4月配付予定の全児童を対象にしたちらしをご覧ください。

文振だより



「教育と文化」御意見BOX

新たに設置しました。
みなさんのご意見、ご感想などをお聞かせください。

※ あなたのお住いの市町村名
を記入してください。

※ あなたは、どの区分に該当
しますか

※ お名前
姓 名

ご意見・ご感想等の記入をお願いします。

記入欄

上記の入力内容を確認して「確認画面へ」ボタンを押してください



メールマガジン「文振だより」

毎月、学校代表メールアドレスに
お届けしています。ぜひ、ご愛読ください。

◆◆◆ vol.33—2025.02.01—

「文振だより」2月号
通巻33号 発行者：公益財団法人 愛知教育文化振興会
ホームページ <https://www.bunsin.org>

◆◆◆

まもなく立春を迎えます。「今年の冬は10年に1度レベルの高温」との報道もありましたが、体感的には寒い毎日が続いております。また、学校現場では、インフルエンザ等への感染が依然として続いているようです。先生方や子どもたちが健康に留意され、教育活動が順調に推進されることを祈念しております。

中学校では、高等学校等への入学試験が始まり、受験生も先生方も緊張して過ごしていると推察します。令和7年入試は始まったばかりですが、本法人では令和8年入試用高校入試問題集の編集委員会が立ち上がりました。子どもたちの力になれる刊行物となるよう取り組んでまいります。

先月、令和7年度版刊行物の第1期注文が無事に終わりました。3月～4月上旬を目途に、配送します。併せて、追加注文も随時承っております。よろしくご検討ください。



申請書提出・刊行物注文締切

- 個人研究助成
 - ・(2年次・3年次)実績報告書・申請書提出/令和7年4月30日(水)
 - ・(1年次)申請書提出/令和7年6月27日(金)
- 郡市教育研究・団体研究助成・学校教育ボランティアグループ助成
申請書提出期間/令和7年5月7日(水)～16日(金)
(団体研究助成は30日(金)まで)
- ◇第Ⅱ期刊行物注文期間/令和7年5月9日(金)～14日(水)



会議の予定

- 第1回文振郡市正副代表者会 4月16日(水)
- 第1回文振郡市事務担当者会 4月25日(金)
- 第1回編集委員長会 6月6日(金)

文振の最新情報は、ホームページをご覧ください。各種応募要項、申請書の様式等もアップしています。

教育と文化

令和7年3月1日号
No.137

発行/公益財団法人愛知教育文化振興会
〒444-0868 岡崎市明大寺町字馬場東170番地1

TEL 0564-51-4819
<https://www.bunsin.org>

